
Ruin

笹霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R u i n

【Nコード】

N 1 2 0 4 F

【作者名】

笹霧

【あらすじ】

死が支配する世界。そこへ迷い込んだ、歳も職業も異なる人達。生きる術はあるのか、世界はどうなってしまったのか。彼らは死の運命に逆らい、独自に逃げ道を探し始める。最後に生き残るのは誰だ。

F r a g m e n t 0 (前書き)

(この小説に登場する人物、場所などはすべて架空のものです。)

F r a g m e n t 0

山村 臣吾

8 / 2 1 6 : 4 7

一体どうなつてやる…

崖の上から神社の方向を見ていた山村は、その光景のあまりの奇妙さに息を呑んだ。

空から青白い光の柱が一本真っ直ぐに伸び、血の様に赤黒い空を淡く照らしている。

「どうなっちまったんだよお!!」

山村は体力の限界だった。

手に持っていたスコップを地面に叩きつけ、その場にへたりこむ。

俺はここで死ぬしかないのか

不気味なまでに赤い空が迫ってくる。

高校生編 fragment 1（前書き）

魘魅市立北魘魅高校

えんみしりつきたえんみこうこう

大正2年開校。

昭和59年改築。

全校生徒数609人。

3階建てで、1、2年が所属する北校舎と、3年が所属する南校舎からなる。

高校生編 fragment 1

佐藤 俊介

8 / 1 16 : 58

えーと、ここがこうなるから、これを公式に入れて…

高校2年生の俊介は、教科書の問題に悪戦苦闘していた。

俊介は、人のいない静かな休日の学校の雰囲気が好きだった。

勿論、彼に限らず、家よりも学校のほうが勉強に集中できるという理由で、休日に学校で勉強する生徒もいる。

俊介は腕時計に目をやる。

もう5時か…帰る準備始めるか…

ふと外を眺めた。

鳥が群れを作り、各々の家へと帰って行く。

空が真っ赤だ…きっと明日は雨になるな。

遠くで5時のチャイムが鳴っている。

俊介は、その音を聞き流しつつ、道具をまとめていた。

その時

あれ、力が入らな

身体の自由が失われ、視界が闇に包まれた。

千葉 遙

8 / 1 16 : 42

人気がない校舎裏。

そこを拠点としていた2人と、そこにいるには場違いな1人がそこで対峙していた。

「ハア？」

「…だから、もう嫌なんだって…」

「お前、秀哉に逆らって…」

「うるさい！もうお前らの言うことは聞きたくないんだよ！」

「んだところ！」

瞬間、いかにも運動が苦手と見えるその1人は勢いよく走り出した。

その後を、坊主頭の男と茶髪の男が追いかける。

前に立つその男は、裏玄関へ向かっていた。

頼む、開いていてくれ…

扉は開いた。

すかさず、後の奴が入れない様に内鍵を掛けた。

追手はまだ来ないようだ。

静かだ。

千葉は、休日に学校へ来るのは初めてだった。

取りあえず、中に隠れないと…

千葉は、その中へと足を踏み入れていった。

佐藤 俊介

8 / 1 17 : 09

俊介は考えていた。

「何だ今の…」

近いうちに病院いこう、そう呟いて立ち上がる。

「キャーーーーー!!?」

突然の悲鳴。

バーーーーン!!

叩きつけられるようなドアの音。

なんだ？

俊介は廊下へ出た。

音ひとつない空間。

特に変わった所はなかった。

ある教室のドアにはめられていたガラス窓が割れていたのを除いて。

俊介はその教室の前へ来た。

凄いな…

ドアは溝から外れているらしく、立て付けが悪い。

教室の中には女子の鞆が2つ。特に変わったところは

ゴソッ

身体に電流が走る。

音は掃除用具入れの中かららしい。

俊介は一步步音が出た方へ歩き出す。

用具入れの前まで来た。

「誰かいるのか？」

いねーよ…

そんなことを考えながらもつい言葉に出してみた。

ギィ

開いた。

人がいた。

千葉 遙

8 / 1 17 : 22

千葉は、目を覚ます。

なんで僕、こんな所に…

そこは、3階にある美術室だった。

千葉は記憶を辿る。

そうだ、あの時あいつらから逃げ出した後、中に入って…

やっぱり思い出せない。

なぜここにいいのかまではどうしても思い出せないのだ。

千葉は、入学以来、友達がいなかった。作る機会もあつたのだが、そのたびにアイツら 鈴木達に呼び出されて脅迫を受けるため、いつもそれ以上仲良くすると言うことは出来なかった。

アイツに見つかからないように学校を出ないと…

きつとアイツらはまだ僕を捜してる 直感でそう感じた千葉は、そっと起き上がるが、足に何か赤い物が付いているのに気が付いた。

赤い絵の具でも踏んだかな…？

その足についた赤色は、入口からここまで、点々と足跡を付けていた。

特に気にせず、千葉は扉に手を掛けた。

そしてすぐに、足についた赤い絵の具の意味を知る事になる。

相沢 涼子

8 / 1 16 : 51

静かな教室の中、2人の話し声と、シャープペンシルを動かす音が聞こえる。

「ねえ、ここってどうやるの？」

「ああそこ？そこはね…」

そう言つて、長髪の女子生徒は、髪を結い上げた女子生徒のノートに何やら書きこみ始める。

「おおー！さすが涼子！」

「ふふ、まあね」

ふと、長髪の女子生徒は壁の時計を見上げた。

「あ、もう5時だ…帰ろつか」「そうだね…そろそろ準備しよつか…あ、帰える前にちよつとトイレ行ってくるから、少し待ってもらつていい？」

「うん、いいよ」

「ありがと！」

そういつて、髪を結った元気な女子生徒は、下の階へ降りていった。

もう8月か…

涼子は、窓の外を見た。

学校の周りが山だからだろう。セミの音も騒がしい。と、いつものセミに混じつて、高い音の鳴き声がある。

ヒグラシだったかしら。

突然、音が消える。

え？

同時に、意識が薄れていく。

え？え？……………

永井 伸英

8 / 1 17 : 44

どこだここ…

…ああ、学校か…

…うわっ！…なんだ兄ちゃんか…後ろにいるならいるってちゃん
と言えよ…

…なあ、ところで、その刀どうしたんだ？…なんで構えるんだよ…
おい、何だよ！何とか言えよ！

…止める！来るな！来るな！殺さないでくれ…

「ハッ！？」

夢か…

夢気分が抜けず、ぼんやり寝転がっていた永井だが、自分の置かれた
状況が少しおかしいことに気が付いた。

何か臭うな…って

「うわぁ！」

思わず声をあげて飛び起きた。
そこは、トイレの中であった。ツン、とくる刺激臭が、男子掃除の
適当さを物語っている。

今何時だ？

携帯を開こうとして。

「…なんだよこれ…」

両手が、服が、赤黒く染められていた。

永井は慌てて水道でその汚れを落とす。

どこかケガはないか確認したが、異常はない。

携帯を開く。

ヤバイ、5時過ぎてる、帰らないと…

永井は足早にトイレを後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1204f/>

Ruin

2010年11月14日09時32分発行